修士論文（要旨）
2021 年 1 月

双胎児の母親が，同等な扱いを意識しながら
個性に対応する心理的プロセスの質的研究

指導　山口　一　教授

心理学研究科
臨床心理学専攻
219J4010
安江　真由

Master's Thesis(Abstract)
January 2021

A Qualitative Study of the Psychological Process that Mothers of Twins Respond to Individuality while being Aware of Equal Treatment

Mayu Yasue
219J4010
Master's Program in Clinical Psychology
Graduate School of Psychology
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Hajime Yamaguchi

目次

第 1 章　研究の背景　1
第 2 章　目的　1
第 3 章　方法
　3.1　調査対象者　1
　3.2　調査方法　1
　3.3　分析方法　1
第 4 章　結果　2
第 5 章　考察　2
引用文献　3

第１章　研究の背景

双胎児育児に関する先行研究は，虐待防止をキーワードに(大木,2017)，産後直後から 2 歳までの育児や，母親の双胎児育児に対する不安や困難感，育児ストレスに焦点が当てられたものが多い。幼児期後期の双胎児研究については，一般的に保育園・幼稚園等に入園する時期に突入してからも双胎児の育児に固有の困難が発生することが示されている（日本多胎支援協会，2018)。

一般的に，幼児期後期には子どもは自主性が高まり，周囲の人々との絶え間ない相互作用により，社会化・個性化をし(増田, 2010)，4 歳になると言葉が思考の手段として用いられ，言葉による自己コントロールをするようになる(長瀬, 2015)。また，遊びの中で他者を参照し自他の関係や自身の在り方を捉える傾向が幼児期後期を通して強くなるとされている(高田, 2010)。

双胎児はずっと一緒に成長し行動をしており，子ども自身が互いを意識しやすく比較しやすい存在であることが考えられる。双胎児の母親は，双胎児同士を比較しながら子どもの発達や成長，個性を認識していると考えられる。また，双胎児の発達や成長に伴う個性の出現や変化とそれに伴う母親の対応は，環境や発達によっていきなり現れるものではなく，子どもの環境や個人差等に左右されると思われる。そのため，発達の区分にこだわらず，より俯瞰的な視点で母親の心理的な変容を捉えることが必要だと考えられる。

第２章　目的

今までの双胎児育児に関する研究は，育児が多忙な幼児期前期までに焦点が当てられやすく，幼児期後期の双胎児育児の全貌が見えづらいのが現状である。本研究では，子どもの発達上の特徴や環境の変化，同時育児の特異性が重なり合う中で，母親が双胎児の変化をどのように受け止めながら育児を行っているのかを明らかにし，幼児期後期までの育児の様子や心理的な特徴を包括的に把握することで，双胎児の母親への理解を促進する。

従来，双胎児育児への理解が不十分であった医療現場や心理職等を含む専門家が，双胎児育児の特異性とそれに担う母親の心理的な特徴を十分に理解することで，双胎児家庭に対しよりニーズに沿った支援に結びつけることが考えられる。

第３章　方法

3.1　調査対象者

幼児期後期の双胎児育児を経験した，6 歳以上(小学生以上)の双胎児を持つ母親 10 名を対象とした。事前に研究担当者からコンタクトを取っていた A 市の多胎児サークルの責任者を通しての募集と，研究担当者の知人の母親から機縁法による抽出を行った。

3.2　調査方法

半構造化面接を実施した。また，調査協力者の記憶の想起を促すためライフライン法を用いた。インタビューガイドを用いて，元々抱いていた子育て観やしつけの方針とその変化，双胎児の比較について，双胎児の成長をどのように受け止め関わっていたか，幼児期後期全体を通しての双胎児の個性の変化と関わりの変化等を中心に聞き取った。

インタビューは新型コロナウイルス対策として Zoom を利用し，1 人に対して 1 回，約 1 時間程度行った。

3.3　分析方法

木下(2009)の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)を用いて分析を行った。分析焦点者は「幼児期後期の双胎児育児を経験してきた母親」とし，分析テーマは「双胎児の母親が，同等を意識しながら個性に対応していく心理的プロセス」とした。

第４章　結果

M-GTA で分析を行い７個のカテゴリーと３個のサブカテゴリー，37 個の概念を生成し，結果図とストーリーラインを作成した。

双胎児の母親は，主に保育園や幼稚園等に入園する前から【2 人を理解しようとし】，既に些細な行動やその違いから双胎児の「性格の違いを把握」していた。また，この時期は【余裕のない育児】をしていることが多かった。双胎児の母親は【生活を支えるサポート】や【相談・連携ができる環境】に支えられており，母親の育児環境の基盤が安定し，育児に比較的慣れると，＜個性に対応していく過程＞を経るような育児に移行する。＜個性に対応する過程＞は，【ずっと一緒にいる時期】の延長で母親が双胎児に対して「平等を心がけ」や「平等な接し方を心がける」をしており，【2 人を同等に扱う】意識や姿勢がその後も根底で維持され続ける。しかしその中でも，母親は徐々に【双胎児の個性を認識し始め】，【試行錯誤して個性に対応】していく。この試行錯誤には「うまくいかない経験」がつきまとい，その経験が改めて【個性を認識し始める】ことや，うまく【試行錯誤して個性に対応】することに繋がっている。しかし，この＜個性に対応していく過程＞は，一度個性を認識したことでその後も対応できるようになるなど，常に一方向的に流れているという訳ではない。サポートを獲得していても，母親自身に余裕がない場合には，外的な環境要因によって仕方なく「親の都合を優先してしまう」ことで【2 人を同等に扱う】対応に戻らざるを得ないこともある。また反対に，【相談・連携ができる環境】を獲得し「母親に余裕ができる」ことで「双胎児の個性を認識し始め」る意識が促進されやすいともいえる。

こういった＜個性に対応していく過程＞が成立するには，大前提として，母親にとっての双胎児が【常に比較してしまう】存在であり，意識的・無意識的に比較をしやすいことが影響している。双胎児の母親には「比較する自分への後悔と葛藤」を抱え続けたり，過去の「自分の育児を後悔」したりする自分が存在し続けるが，同時に【入学・入園に伴う変化】と共に＜個性に対応していく過程＞を経ることで「子どもの成長・発達を実感」し，双胎児の【成長への喜び】を感じることができる。双胎児の個性は，その後もより明確化し，変化していくことが考えられ，母親は双胎児の成長に合わせて＜個性に対応していく過程＞を繰り返し続けていくと考えられる。

第５章　考察

本研究は，入園に伴う双胎児の社会化と相対的な個性化に加え，乳児期に比べて言語が著しく発達する 4 歳頃の自己主張や自主性の広がりに着目し，幼児期後期の双胎児育児を経験とした母親を調査対象とした。しかし，個性の把握が性格特性把握の延長上にあり，双胎児同士や友達との関係，母親との関係，環境要因に影響されるため，子どもの個性化は非常に連続的な変化であった。そのため，母親も個性に対応する行動のほとんどは日常生活で子どもと向き合う中で自然と選択された印象を受けた。このことから母親が双胎児の個性に合わせるプロセスは発達的な特徴を皮切りとして突然生じるものではなく，子どもの歩き始めや言葉の使用，環境の変化，対人関係の変化，双胎児間のパワーバランスや関係性の維持や変化といった，日々の様子や連続的な成長の中で逐一行われ繰り返されるものであると考えられる。

双胎児育児は同時期に 2 人の子どもを育てるという特性上，母親が授乳等の育児のタイミングや与える物（服，おもちゃ等）や子どもを相手にする時間や態度を同じにしようと意識することが多く，最初は母親自身の尺度でそれが事足りていても，幼児期後期頃になると双胎児は常にお互いを意識し，まずは母親に同等の扱いかそれ以上に自分に関心を向けてもらうことを強く求めるようになると考えられる。そのため，母親は自分の尺度による同等な対応だけでなく，双胎児の求めに応じて対応しなければならなくなってしまう。これを繰り返す中で，母親は双胎児の主張に対応することに慣れ，その後の個性化への対応に繋がっていくと考えられる。

双胎児の変化として特徴的だったのは，関係性の変化である。入園前は双胎児が同じ環境で生活することが多く，その場合双胎児の関係が非常に密接になると考えられるが，入園による

環境の変化や子ども自身の発達の変化等が影響し，それぞれが友達作りをし始めることで，家庭内では双胎児同士で遊び，家庭外では友達とそれぞれ遊ぶという構図になると考えられ，この点が幼児期後期の双胎児育児において非常に特徴的だと考えられる。また，母親はクラス分けの際に双胎児同士の関係や友達作りの状況を鑑みてクラスを同じにするか，別々にするかの選択をすると考えられる。

また，双胎児を育児する上で双胎児の比較は必ず生じ，個性を把握する際にも必ず作用するものと考えられるが，比較する自分に対して後悔や葛藤を抱くこと，また，それぞれの個性に対応するよりも母親の都合によって子どもに十分に対応することができない経験への後悔は少なからず見られ，これは双胎児育児の特徴であると考えられる。

母親が双胎児の個性を認めて対応する育児を行うことは，双胎児が双胎児であることを理由に同じ扱いを受ける段階から，明確な自己を確立し自分らしさを獲得していくために必要な姿勢であると考えられる。そのため，双胎児の母親の育児を外的・内的な要因双方から支えることは，母親の心身を助けるだけでなく，双胎児の成長を促すためにも重要であると考える。以上から，双胎児育児を担う母親や家庭の支援として，母親が育児について相談ができる体制の強化や，支援制度の拡充を進めること，母親が双胎児育児に向き合える力を育てる支援を行うことが考えられる。 特に後者については，育児のノウハウを教えたり，誰か相談できる相手を確保することで安心感を得たり，双胎児の成長を受け止められる力を育てることが考えられる。また，本研究では見られなかったが，双胎児の発達の差が大きすぎる場合，双胎児間での育児の大きな格差や虐待，偏愛等に繋がるリスクが生じたりすると考えられる。そのため，双胎児間の発達差が見られる場合には手厚く育児をフォローし，定期的かつ長期的に相談できる環境を整えるべきだと考える。

本研究では，調査対象者が多胎児サークルを経由して募集したこと，保健医療関係の職歴を持つ者が大半であったことから，サポートが比較的充足しており，子どもの発達についても基本的な知識が一般的な母親よりも豊富であった可能性がある。今後はより広い領域から調査対象者を募集することが考えられる。また，今回は何らかの形で個性に対応する母親の語りばかりが得られたが，個性への対応に困難を感じた母親も調査対象とし，ネガティブなエピソードについても広く収集・分析をすることで，本研究で抽出されたプロセスの強化や新しいプロセスの生成ができる可能性が考えられる。

引用文献

木下 康仁(2009). ライブ講義 M-GTA：実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて　弘文堂

増田 公男(編著)(2010). 発達心理学の展開：子ども学入門　あいり出版

長瀬 美子(2015). 幼児期の発達と生活・あそび　ちいさいなかま社

日本多胎支援協会(2018). 多胎育児家庭の虐待リスクと家庭訪問型支援の効果等に関する調査研究　厚生労働省 平成 29 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業. Retrieved from https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/000520465.pdf (2019 年 12 月 23 日)

大木 秀一・彦 聖美(2017). 日本における多胎育児支援の歴史的変遷と今日的課題 石川看護雑誌. *14*, 1-12.

高田 利武(2010). 日本人幼児の社会的比較：行動観察による検討 発達心理学研究. *21*(1), 36-45.